未来へ託すもの ―校歌にこめられた願い（Ⅱ）―

三重県立四日市農芸高校生徒会誌『こだち』第三九号、一九九八年三月一日

野崎 智裕

〈スクールエッセイ〉

未来へ託すもの

――校歌にこめられた願い（Ⅱ）――

野崎智裕

一．「幻の一冊」になるかも

松尾芭蕉の自筆本『おくのほそ道』が、江戸期以来およそ二百五十年ぶりに見つかったというニュースがテレビや新聞で大々的に報道されたとき、あやかりたいと思いました。まだ見ることができない一冊の本があるからです。それは、農芸高校校歌の制定に力を尽くされた故・下河茂嗣校長先生が書き著した一冊で書名を『イソップの話』といいます。この本については、教育者としての信望と敬愛を集められた先生の逝去を悼んで編まれた『偲ぶ草　下河茂嗣追想録』（以下、この本を『偲ぶ草』と略記します）にあげられた「主なる著作」全七冊の一冊としてわずかに「B六判　九十四頁、泰文堂発行」ということ、昭和二十五年（一九五〇）にこの本を使って校長先生自ら授業をされたらしいこと[1]が知られるばかりでした。三年前『こだち　三五号』に発表した前稿『校歌にこめられた願い』（以下、本文中ではこの拙稿は前稿と略記します。）を書き上げる段階から今まで四年近く探し続けています。書物にくわしい内外の方々に相談を重ね、意見を求めては、仕事の合間をぬって、あたうるかぎりありそうなところをずっとたずね歩いてきました。

この一冊があれば、実物を読むことができるなら、教育者下河氏の全人像や英語教育への情熱がよりいっそう明確にわかるからです。ページ数からみても、イソップ物語から精選して構成されたのでしょうから、岩波文庫版で二七〇頁にわたり綴られた全部で三五八の話をどのように取捨選択したかということもヒントになるでしょうし、学生時代下河先生に教わった方々に直接聞くことで生きた指導ぶりをたどることも今ならとりうる方法でしょう。

そのようなことが実現できる希望を持ちながら、前稿発表後に得られた新しい知見をまじえて、校歌にみられる先人の方たちの想いを再びたどることを試みようと思います。

二．二つの校歌

前稿は、主題名を「校歌にこめられた願い」、副題として「育つ営為の原点」とつけ、今日まで受け継がれている校歌の成り立ちの経緯を明らかにし、あわせて、来る一九九九年二月一日に創立七十周年を迎える農芸高校の知られざる美質を前回担任したB組・園芸科を始めとする在校生に過不足なく話しかけ、もって伝統校の学生として自覚を深めていくきっかけとなることを願ってまとめました。彼ら彼女たちの卒業を見届け、新入生のクラス担任と授業を受け持つことが決まった時、高校生活のガイダンスとして校歌のことから始めてみようと決めました。学科改変により流通システム科、緑花システム科と名実ともにこれからの産業教育を担っていく期待を背負って入学してきた初代A・B組からC組・D組までの四クラスで、週二単位の「現代社会」の時間の冒頭、後述する壽岳文章氏（校歌の作詞者）の畢生の代表作『神曲』三冊全冊を教室へ持ち込み、順にまわして見てもらいながら、解説を進めました。B組での第一回目の終わりのチャイムが鳴り、礼が済んで後片づけをしていたら、Mさんが教卓のところに来て「先生、この人ら（作詞者と作曲者・大澤壽人氏二人のこと…筆者注）、うちの中学校の校歌作った人と同んなじ―」と告げてくれたのです。思わぬ話に驚きました。一度どんな歌か見せてという頼みをきいてくれて、数日して四日市市立中部中学校の生徒手帳を持参してくれました。まちがいありません。同じ組み合わせでのもう一つの校歌の出現でした。

二度ほど中部中学校へどのようないきさつがあるのか教えを乞いましたが、不詳とのこと。この校歌発見から約一年近くたち、最近初めて同校へ取材に出かけました。清潔な鉄筋校舎二階の校長室入口に案内されると、校歌の詞文と楽譜の生原稿がそろって立派に額装されかかげられています。「学校沿革史」（最新の学校要覧所蔵[2]）によれば、昭和二十六年二月一日制定とあります。とすれば、農芸高校の校歌作成のため、作詞者が河原田の校舎へ来校された時期が昭和二十五年十月上旬と伝えられることから、ほとんど同時期に相前後して制定されたとしてよいでしょう。

ここでは、上段に中部中学校の、下段に農芸高校の歌詞全文を原本（生原稿）の体裁のまま、掲載してみます。そして両者の特色を並べながら、校歌ゆかりの方たちの教育への考え方・志・学生に寄せる視点の周辺へふみこんでいけばと思います。

四日市中部中学校〃歌

作詞　壽岳文章
作曲　大澤壽人

一

磯の香の　さはだつ港*
うちよする　世界のうしほ
あすの日の　日本をになひ
ここに立つ　我らの母校
伸びよ茂れよ　たくましく
われらの中部　中学校

二

若うどの　明るき胸に
さやかなる　姿をきざむ
あさゆふの　鈴鹿山なみ
ここに立つ　われらの母校
満てよ　みのれよ　たくましく
われらの中部中学校

註

第一行「さはだつ」は「さわやかに立つ」の意なれど、現行の騒立を（喚カ）想するも可。

（原本は、無地の紙に毛筆で歌詞が書かれている。原寸縦十八センチ×　横五十四センチ）

三重懸河原田高等学校〃歌

作詞　壽岳文章
作曲　大澤壽人

一

歴史は古き河*後に
生くるこの日をよろこびて
土に親しむ　あさふゆの
いのちをひらく知慧のかぎ
この河原田の学びやは
若うどわれらのこころのふる
さと

二

柑橘みのる丘の上
夢多き日の眼をあげて
東を見れば　海の青
さやけく胸にしみわたる
この河原田の学びやは
若うどわれらのこころのふる
さと

三

むかしローマのうたびと**が
すべて（ヒ）　勝つとたたへたる
額の汗のとうとさを
知りて三とせの春と秋
この河原田の学びやは
若うどわれらのこころのふさと

註

*　三重郡河後郷訓加般之利（和名抄）

**　Vergilius

***labor omnia vincit improbus (= Persistentt oil overcomes all Vergilius,

Georgiea, I, 145.)

（農芸高校校長室に額装され壁にかかる原本は、金地の紙に毛筆で歌詞が墨書されている。原寸縦十七・六センチ×横六十・五センチ）

紙に壽岳氏直筆[3]で毛筆によって詞文が綴られている点、校歌名に続けて、作詞・作曲者の氏名が並記されている点、詞に仕上げたことばの背景や、いわれ、思想面での註釈が書き添えられている点が、両者の形のうえでの共通項でしょう。

詩句を対比して、内側へ迫っていくこととします。校歌という性格上、学校全体の特色、学校の独自性を強調する傾向がみられるのは自然な展開ですが、「母校」、「学びや」（＝学舎、学校）、「われらの（学校）」という文言に共通するのは、自分の入学した学校への愛着を持つこと、誇りを抱いて学生生活を送れることを願う作詞者のこころがらのようです。十代半ばの若者たちに、伸びていく力を限りなく秘めていることを自覚し、明るく人生を肯定して、そこから先の自分の生活と社会を創り出していく初心をさぐりあて将来に備えてほしい。国中が飢えて、お腹いっぱいに食事することなどほとんどかなわない当時の混乱のなかで、しっかり学ぶ強い気持ちをなくさずにいて。行間からは、当時五十一歳の大学者の暖かい心根と愛情があふれているようです。

ファーストフードや二四時間営業のコンビニ、あるいは、〇〇食べ放題と書かれたのぼりが街角にあふれて、お金さえあればいつでも、好物をどれだけでもと思いがちな現代

日本人の飽食とは正反対に、わずか四十六年前には生命をつなぐことがことのほか厳しく[4]、仕事や進路も、安定した生活と結びつくかどうかが最大の判断基準でした。現在よりはるかに、学校へ行くのもあたり前のことではなく、経済が優先して、まず就学者の割合も現在よりはるかに低く、また学費が続かずに泣く泣く途中で仕事につくことも珍しいことではなかったのです。就職すること、言い換えれば実社会で生きていく道へ歩み出すのにふさわしい仕事かどうかの基準は、例えば、「そんな仕事（会社）で食えるのか」という言いまわしひとつにも反映されていたのでした。このような日本の社会状況で、限られた数の若者が進学したのにとどまった[5]のですけれど、それだけに彼ら彼女たちには、先々戦災の傷跡深い日本の復興と発展を担う実力と社会全般を導くリーダーシップを身につけるよう広く期待されたのです。そして、この二つの校歌には、昭和二十五年当時の学生たちはもちろんのこと、そこから先ずっと続いて入学してくる若者たちも等しく伸びゆくようにという、あるいは、日本人の将来、学校の果たす役割へ寄せる願望が息づいていました。（校歌の詞文に即しての話は、第四章で再びとり上げます。）

三、著作をめぐる三題噺

校歌がその品格と内実のままに、気持ちをこめておごそかに斉唱される場は卒業式です。三年間の来し方とこれからの新生活を思い描きながら、「三とせの春と秋」に級友たちと区切りをつける時は三年間の学業が花開く瞬間でもあります。

その門出に向けて行われる在校生の練習に加えて、最近の農芸高校で校歌が繰り返し実際に歌われる機会は、入学式の直後にあるオリエンテーションが中心となります。学生の立場に立てば、入口で初めて見聞きし、卒業で自分の成長を確かめ歌うといった感じになるのかもしれません。

以下、本章では、今に伝えられている校歌を生みだした三人の関係者、下河茂嗣氏、壽岳文章氏、大澤壽人氏の人となりを、三氏各々の著作からわかることを中心に紹介したいと思います。

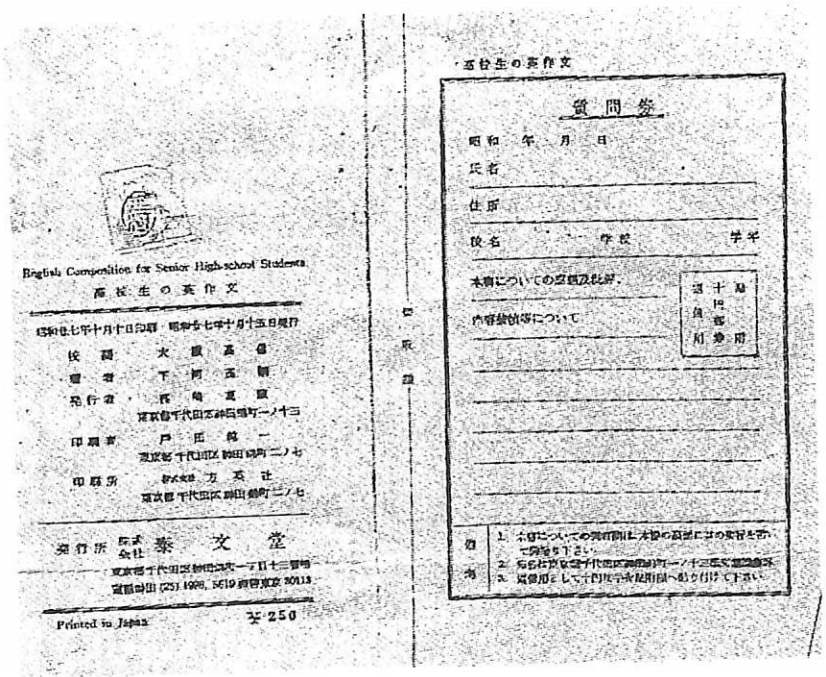
（一）　校長であるとともに

下河先生は、英語教師で、県下へ赴任されて間もない頃、旧制の津中（現、津高校）では上級生に自らの著作を併用し授業をされてみえて、穏やかで都会風のスマートな風貌によりたちまち学生たちの注目を集められました。[6] 教育者としてのプロフィールは『英語教育史資料』第五巻[7]では、次のようにあります。

一八九九～一九五三（明治３２～昭和２８）福井市の生まれ。福井中学校から、東京高等師範学校英語科を１９２２（大正１１）年に卒業。同期生に池田儀一郎、大塚高信がいる。福井県大野中学校、金沢第一中学校、東京府立第二中学校、三重県津中学校の英語教師を歴任して、木本中学校、桑名中学校、第二次世界大戦後は河原田、神戸、員弁の各高等学校長として活躍。大野中学校在任中の斉藤静の影響で英文法に興味を持つとともに、解釈・文法・作文・のいわゆる三位一体の英語学習指導法を主張した。その具体的な実践が「三位一体シリーズ」ともいうべき『初級総合英語問題』、『中級総合英語問題集』（篠崎書林）である。現在は大塚高信の手によって改訂拡大されているが、本来は下河の立案によるものである。その他『高校生の英作文』などがある。

（傍点は筆者による、以下注も含めて同じ）

ここにもふれられているとおり、英語教育に業績が多くあります。それらの英語学習量の実物各編を通して見て気づくのは、生徒とともに学習する、あるいは生徒のモラルを信じる態度・姿勢が一貫しているところです。まず、校長職務をこなすとともに精力的に書かれた英語教材テキスト末尾に共通してみられる左のような「質問券[8]」があります。



高校生の英語学習が進むように、わかりやすい効果のあがる構成や工夫がなされているのも特色なのですが、不特定な多数の読者＝全国の高校生に対して、読後の「感想および批評」や「本書についての質問」を求めて彼らの声に耳を傾けようとする柔らかい心、謙虚さは、このタイプの書物に例を見ないところです。最近の数多い学習参考書と比べてみても大変すぐれた好企画と言えるものです。

ここにもうかがえるようなよりよき指導実践を求めていく意志は行動を伴ったものでした。農芸高校在任中、

母校は昭和２５年４月三重県立河原田高等学校と改称し農芸学科のほかに新たに家庭科が設置された。これを機に同年５月校章制定委員会を設けて職員生徒から校章の原案を募集し応募作品中より全校生徒投票によって現校章を採用した。

と記録されている[9]とおり、着任後二ヶ月目にして校章を一新することに着手、生徒の参加を促し、生徒にも判断を任せる全校投票で、自分たちの校章（学校のイメージを対外的に示す学校のシンボル）への愛着を根付かせることを実行されたのでした。半年後、今度は校歌作りを手がけられて、結果的に1年のみの在任とはいえ、ゆるぎない学校経営のいしずえを築き上げたのです。その校歌作りが本格化

していたのとちょうど同じ頃に出版された校長先生の新著[10]の「はしがき」書き出しと文末の数行をそのまま引用し、本節のしめくくりにします。

英語の学習は、読むこと、聴くこと、話すこと、書くこと、この四つのことが総合的に且つ並行的に行われなければ、正しい英語の学習の効果は得られないと思います。（中略）

（以下が文末の部分）

尚本書の大きな特徴の一つは、挿画を沢山入れたことです。（中略）一々「訳」をする悪習を極力避けること、英語をそのまゝの形で理解すること、即ち英語を通して英語を理解することこれは非常に大事なことですが、実際なかなかむずかしいのです。然し「挿画」を豊富に使うことで、この考えは或程度実現出来ると思います。

然し全体の編集が理想的になっているか否か、疑問の点も多々あると思います。御使用の上で種々御気付の点御教示項けたら幸基と存じます。

Aug. 14, 1950　　著者しるす

（二）国際理解の先駆者・壽岳氏

下河先生の依頼を受けた壽岳文章氏は、昭和二十五年十月上旬学校へ来られて、校舎や周辺の風景を自分の目で見て、校歌歌詞の構想を練られました。前稿をまとめていくなかで、この方の学者としての実績の数々を拝見できたのが本格的な初めての機会となりました。御名前を知ることは遅く、また偶然の幸運でもありました。それは、第一章で触れた三冊本の訳書『神曲』を図書館の本棚で見かけたことから始まりました。新刊書として見かけることの多い46判の平均的な単行本にまじって、三冊がまとめて並んでいたのでした。大きいなという第一印象を持ち、背表紙をじっと見ると『神曲　天国篇　壽岳文章訳　集英社』等とあります。たちまち書名を覚えました。手にとれば重い。それもそのはず、三冊合計で四・一キロあります。縦三十・五×横二十二センチの大きさで、書物をこよなく愛した壽岳氏らしく、装丁も自ら手がけられてみえます。三冊の概要を表示してみましょう（表1）。病苦と聞いながら、イタリア語原著で一万四千二百三十三行の『神曲』を七年がかりで、「ただ一語のために、一日も二日も考へあぐねた場合も少ない」時もいくたびもまじえつつ、満七十六歳目前に、ご本人の試算で一日あたり終わってみれば五行半のペースで仕上げられた代表作です。「序」で自ら語られているとおり、翻訳そのものは、人生の後半で着手して全うされたわけですけれど、神曲とのかかわりは幼時から深いものがありました。そのあたりのことに言及した一文を次に引用します。

表1　『神曲』三冊の概要

	書　名	刊行年月日	頁数	表紙の色とそれが示すもの	備　考
1	地獄篇	昭和４９・１・２５	353	深紅・薔薇－違背と痛苦	三冊全体の「序」文がある。
2	煉獄篇	昭和５０・６・３０	262	黄・向日葵－浄罪	巻末にＰ．６にわたる「ダンテとブレイク」がある。
3	天国篇	昭和５１・１１・２０	278	白・百合－至福	巻末にＰ．６にわたる「神曲を訳し了えて」がある

越えて一九一八年の春であったが、京都の星野書店から、上田敏『ダンテ神曲未定稿』が限定出版されたとき、中学五年生（旧制中学のこと、現在の高校二年生に相当する・・・筆者注）の私は読みたくてたまらず顔見知りの書店、寺町三条上ル若林春和堂に赴き、事情を話し、貸してもらひ、一晩かかって写し終わり、翌日返しに行ったことを覚えている。すでに四年生の時から学資の乏しくなった私には、さうするよりほかは無かったのである。しかしそのおかげで、今でも私は、その未定稿の、文語・口語さまざまの訳しぶりを、さやかに思ひ出すことができる。

（下略）　<右の一文は一九七二年十月に記されている>

文字どおり、一生かけた大作になった『神曲』ですが、右に引用した箇所の傍点部分「さやか」は、（＝「明るくてはっきりしている」の意）一九五〇年の農芸高校校歌二番、翌年の中部中学校校歌二番にも用いられていました。二十年余をへだてる用法に共通するのは、執念・情念・丹念を尽くして完全に自分の一部分として自在に使いこなせることばのもつ生命力なのかもしれません。

ことばについては、『神曲』の訳文を組み立てていくうえで、

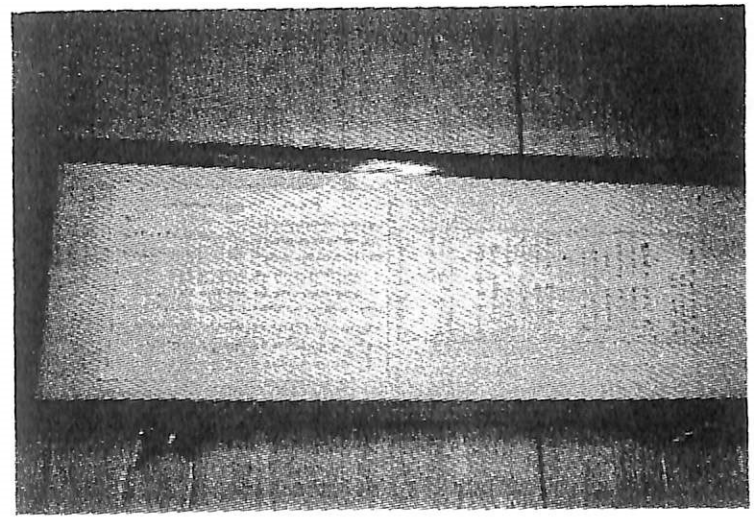
私はまた、今昔物語や狂言に代表さわる語り物の言葉をまま登場させたが、それは、中世といふ世界史共通の視野にダンテをとらへようとする、私自身の好みだと理解していただきたい。

と「序」にあるような工夫をこらすことも注目しなければなりません。つまり、洋の東西の文字をともに修得したうで、『神曲』＝原典の完成は、一三一二年とされますから、同じ頃の日本文学のなかで話しことばがふんだんに用いられている作品群から適切な訳語を抜き出していこうとされたのです。

壽岳氏の著作には、和紙の技術や日本各地の和紙産地を夫人・しづ氏と共にとても詳しく調べて書き著した有名な『日本の紙』[11]・『和紙風土記』[12]等があり、千年にわたり伝承された紙漉きという日本文化の華に精通し、と共に『神曲』の訳文にも見られるように原文の風格を尊重したわかりやすい、力感いっぱいの日本語に絶えず関心を持ち続け、満州事変から続いた戦争への疑問から同時代へ戦争を忘れないようにと『神曲』翻訳に挑むなど、日本内外に月配りがきく、バランスのとれた第一級の教養人でありました。この人の厖大なことばの宇宙のなかから、校歌詞文が創り出されたことでした。

(三) 大澤壽人氏・作曲という独創

農芸高校では、校歌楽譜の原本を見つけることはできませんでしたが、中部中学校では幸運に恵まれました。その写真を揚げます。



実物は、大阪中央放送局の縦書文字が中央部に左右二つ書かれ（原寸縦二十九×横四十三センチ）の用紙に「四月市中部中学校校歌」とまず題、その右横上段に「壽岳文章作詞」下段に「大澤壽人作曲」と記されてあと五線譜に記された記号とスコアの間に歌詞ページにわたって収っておりました。農芸高校作曲とほぼ同じ頃の作曲者自筆です。

作曲者の御長男・壽文氏は、この当時小学生でしたが、壽人氏が神戸女学院大学音楽部の教授や大阪放送管弦楽団の指揮者をされてみえて、そこの学生さんや楽団関係者が自宅へ大勢出入りしてホームパーティもよく開かれていたこと、その一方で自室でドイツ製のピアノに向かい夜遅くまで作曲にいそしみ、疲れると翌日気分転換に自転車の後ろに壽文氏を乗せて自宅から近い西宮市の海岸までよく連れていってもらったこと等を今もよくおぼえてみえるそうです。

校歌作曲者・大澤氏は、中学時代からルーチン・ヴェラヴェルディについてピアノレッスンを受け、昭和初期にアメリカの大学で学び学位を修得、次いでイギリス・フランスでも研究を積み重ね、昭和十年欧米で日本最初の作曲家、指揮者としてデビューした経歴[13]をお持ちです。

昭和二十八年十月惜しまれつつ急逝、追悼集会実行委員会にも名を連ねる朝日放送取締役編成局長・原清氏は、死後集成した『大澤壽人作曲編曲　合唱曲附　ホームソング集』（ABC朝日放送刊）[14]の冒頭に「星の言葉を聴こう」と題して、次のような別れのことばを書きつづってみえます。（意をくむため全文を引用します）

私は星を見るのが大好きである。

一月の勤めを終えて、夜更けてたどる。郊外の我が家への道。その途中で並木の茂み越しに仰ぐ星の美しさは、いつも私の疲れを慰めてくれる。

夜間飛行の機窓からのぞき見る星空の風情も捨て難い。

しかし、私が一番好きなのは、夜の大都会に林立するビルディングの谷間から見上げた黒い空に、静かに逞しく光り輝く星影の美しさである。

ネオン輝く地上の軽薄な人工美に比べて、これはまた、なんという考え深い、悟り切った星の色であろう。

都会の星は、地上の喧騒と混乱を静かに見下ろしてはいるが、決して非情冷酷ではない。地上の情熱を全部、身に吸い込んで、燃え出しそうな熱量をもちながらも、端然を清純な正座を持している。その姿が、私はたまらなく好きなのである。

大沢壽人君は、いわば、そういった型の人物であった。

あらゆる近代的な要素を吸収し、消化した上に、清

純な情熱をもつ作品を創り出してゆく才能があった。

欧米の技巧を学び、日本趣味を生かし、古典と現代を中間音楽の名で結んだ彼の作風は、正に都会の夜空に輝く明星の姿でもあった。

その明星が忽然として消えた。淋しい。

しかし、彼が残していった幾多の名作は、久遠の命を続けて、今後も、この美しい星のささやきを聴かせてくれるだろう。

ここに特集した五十篇のホーム・ソングは朝日放送が毎朝九時から放送した彼の作品を集めたもので、逝ける明星が音楽で語る「星の言葉」の数々である。

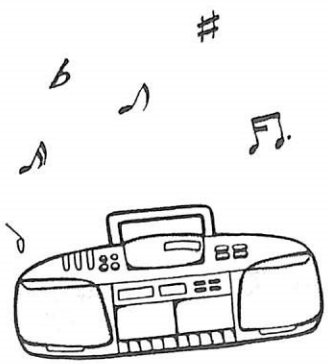
その美しさ、楽しさを再び、しみじみと味わっていただきたい。

全部で二百三十一頁に及ぶこのホームソング集の題名・作詞者名・基本音階の一覧表を次にあげます（表2）。

「表2・大澤壽人氏作曲ホームソングリスト」

	題名	作詞者名
一	母の愛	山田民子
二	ララ一日が健やかに	安西冬衛
三	マリ子の歌	森本やす夫
四	猫をあげますいらっしゃい	竹中　郁
五	日曜大工	ふかみみよ
六	幾山河へだててても	喜志邦三
七	マッチの箱	竹内はじめ
八	木のぼりの歌	安西冬衛
九	ひなたぼこ	中尾実子
一〇	つばめとはとのすれちがい	竹中　郁
一一	晩秋	渡辺勉
一二	あの山越えて	喜志邦三
一三	もつれ糸	足立晴代
一四	公孫樹のロンド	安西冬衛
一五	我が輩は猫です	白井とし子
一六	もしも	竹中　郁
一七	時間	藤原とよ子
一八	手鞠歌	喜志邦三
一九	踏切	竹中　郁
二〇	冬ごもり	安西冬衛
二一	雨だれ	坂本和子
二二	去年の服	佐々木とよ
二三	春の南京町	江川恵子

二四	壊れた人形	喜志邦三
二五	春の扉	南谷健一
二六	でも　ひょっと	安西冬衛
二七	誰かが窓をのぞいてる	北岡都留夫
二八	もく拾いの歌える	竹中　郁
二九	薔薇の花かげ	牧　昇治
三〇	朝の九時すぎ	喜志邦三
三一	ペダルをふんで	大竹安喜
三二	泣き黒子のラブコール	安西冬衛
三三	さかな釣り	前田栄一
三四	遠眼鏡	竹中　郁
三五	ラジオを讃える	古山一美
三六	雨の日のスケッチ	喜志邦三
三七	星と歩いて	大竹安喜
三八	金魚鉢	竹中　郁
三九	水遊び	喜志邦三
四〇	月の音頭	石山清三
四一	子守唄	谷川逸子
四二	ひまわりの歌	喜志邦三
四三	ふるさとの峠道	秋田泰治
四四	虫売り物語	結城みどり
四五	山のぼりの歌	谷川逸子
四六	ドンキホーテと風車	森田賢治
四七	電車の中で	西浜　保
四八	寺の和尚さん	山田達也
四九	木の下のワルツ	石山清三



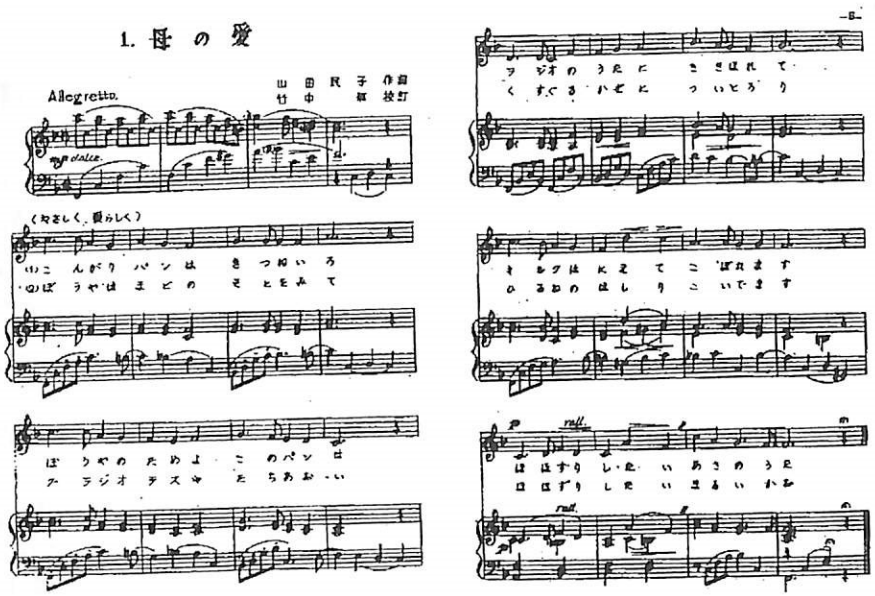
大沢壽人氏の作風について

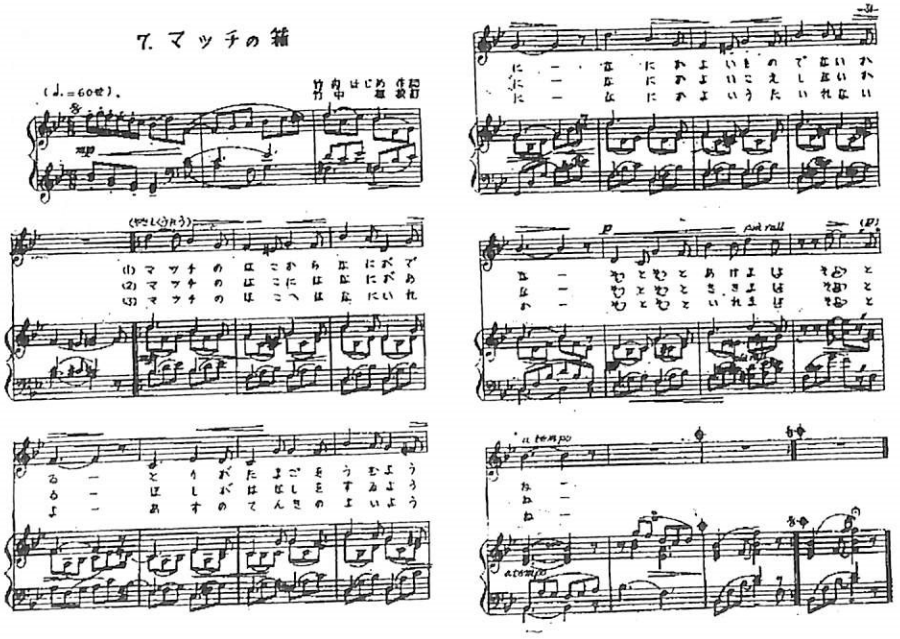
大沢氏の子孫の方から氏の合唱曲集の楽譜を頂戴した。「大沢壽人作曲編曲・ホームソング集（合唱曲附）」という表題だ。ＡＢＣ朝日放送から出されている。ということは、ラジオ番組の中で紹介された歌であろうと思われる。全部で４９曲、すべての歌に独唱譜と合唱譜が用意されている。それぞれ２番ないし３番までで、楽曲としては短いものばかりである。作詞者は３０人にものぼり、おそらく公募したものではないかと思われる。内容は子供たちの遊びや生活、村や町の日々の営みとその中で感じられる季節の美しさを、素直に明るく詠んだものが採られている。曲も長調のものが圧倒的に多い。

さて氏の作風についてであるが、詩の優しさ、温かさを歌いやすいメロディーに載せている、と表現するのがふさわしいと思う。ただし歌いやすいというのは、音階的に単純であるとか、リズムが平易であるというのではなく、言葉を無理なく旋律にしているということである。日本語のイントネーションやアクセントが、自然な形でそのまま歌になっているのだ。そして詩が素朴であるように、音楽も妙な技巧や和音を使うことなく書かれている。実際に楽譜を見て確かめてほしい。合唱曲にすることを前提にした歌だから、完全に一致しているわけではないが、日本語（標準語）の高低と音譜の高低が８０％以上重なるのである。また、撥音「ン」や拗音の扱いについても、その微妙なニュアンスを絶妙にリズム化している。日本語は音節（一つ一つの音）が単純で明確であると思われているが、実際に声に出して朗読してみると、そうではない。一度、手を叩きながら言葉をしゃべってみるとよく分かる。一定の速さで音節をで発音しようとすると、お経のようになってしまうのである。（実際にはお経にもリズムはある）氏の曲の音譜の長短をたどってみると、それを見事に処理していることがわかる。

この曲集に見られた氏の作風は、私たちの校歌にもよく生かされている。詩を朗読しながらメロディーを思いうかべてほしい。一番から三番のそれぞれの歌詞もよく処理をされているが、何といっても圧巻は、サビの「この河原田の学舎は、若人我らの心のふるさと」であろう。見事にイントネーションとアクセント、リズム、そして伝えたい言葉の強さが一致しているのである。

（この部分、文責＝松生）





紙巾が限られているので各作品の詞文は紹介できませんけれども、全体的に作詞者、作品によってはその詞に付け加えを施した校訂者の着想やモチーフ、詩意をしっかりくみとって曲がつけられていて、全篇にわたり合唱向けの楽譜も工夫をこらして仕上げられています。

テレビがまだなく、ラジオが音をそのまま生かせる唯一のマスメディアであったこの頃、毎朝九時に放送され、一般リスナーにわかりやすい仕上がりをめざした柔軟なこころのきらめきが随所に発揮されています。一例として、作品中の第三十二「泣き黒子のラブ・コール」のスコアを紹介しましょう。（楽譜は下のように各曲二種類づつ作成。）

楽譜の冒頭アンダンテの記号横に「シャンソン・ド・パリー風に」と添えられた演奏のための具体的な指示が、すなわち作曲者の施律に寄せる考えの核心をついた一言がほとんど全部の作品についています。一曲一曲を詞の持ち味を生かしながら仕上げてみえたことがしのばれるのです。

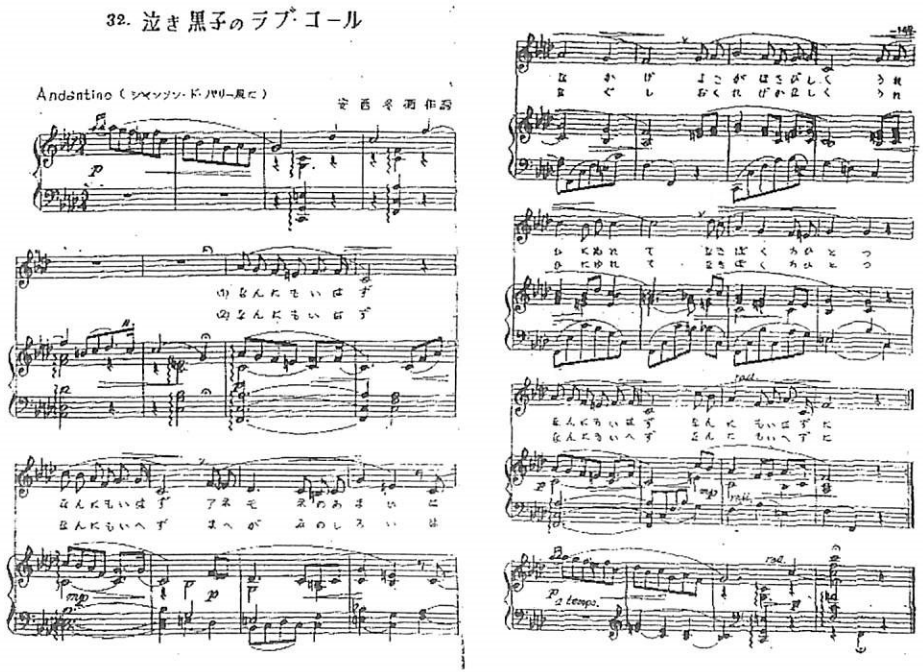
本章では、ここまで校歌ゆかりの三人の方々のお仕事を紹介することに努めました。もとより、これらは、質・量ともにゆたかな全業績の一部分にとどまります。三人の先人に共通するところは、日本をよく知り、それと同時に海外（欧米）の諸事情に精通してみえたというあたりではないでしょうか。現在用いられている教育についての視角になぞらえれば、「多文化の特色をよく理解している」「世界の現状を見極めている」要素が、いずれの方にもはっきりと認められるのです。ひとことでいえば、バランス感覚に優れた教養人なのです。

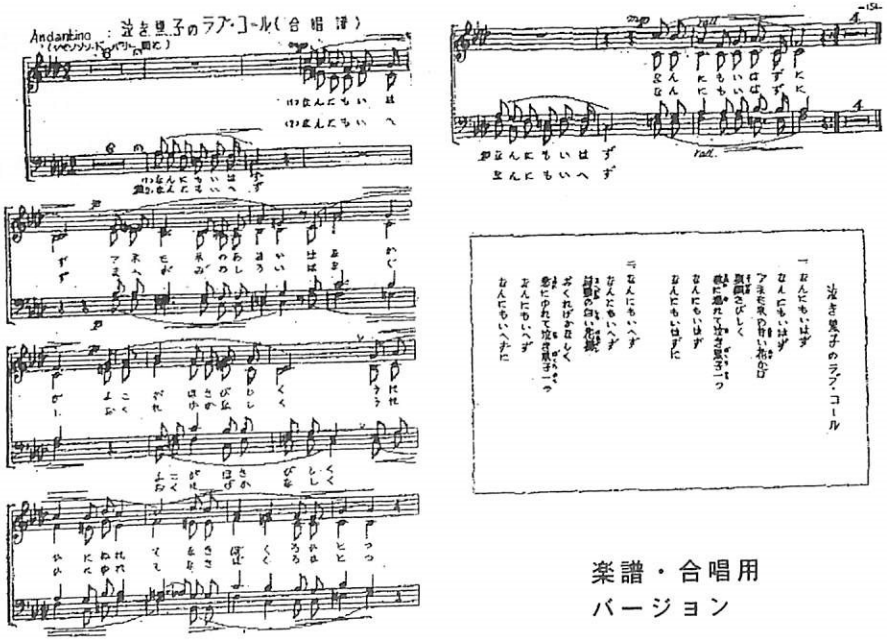
お三方、下河氏が五十二才、壽岳氏五十一才、大澤氏は四十四才の晩秋の頃に、教育者としての使命感と英文学者の素養、作曲家の繊細な感性が和して、校歌誕生となりました。時に一九五〇（昭和二十五）年。

32. 泣き黒子のラブ・コール

Andantino（シャンソン・ド・パリー風に）

安西孝酒作詞





楽譜・合唱用
バージョン

四．農芸高校（四農）の校風ということ

それから四十二年後の平成四年の春に、四日市農芸高校へ着任した日は雨降りでした。辞令を頂いてから校長室で新任者たちがしばらく歓談していた折、ふと思い立って校長先生に、農芸高校の略した名前はどういうのでしょうか、とたずねたときのやりとりを思い出します。しばし考えられて、御自身も本校の卒業生でいらっしゃる当時の別府銀孝校長先生は、「四農（よんのう）になります。わたくしたちの頃は、河農でした。」と穏やかに答えられました。四月は、新しく職員になった人々、転勤された方々との出会い・別れの場が大半の職場で設けられます。この席上、しめくくりに全職員が肩を組み、声も高らかに歌ったのが、農芸高校の校歌でした。どの先生方も自信に満ちて、気持ちよさそうにお腹の底からの声で堂々の歌いっぷりです。何より良かったのは校歌を歌いながら、わたくしたち新任者も含めて職員間の気持ちが一つになれたことでした。学校の活気、元気に圧倒されたスタートとなりました。

平成八年現在の農芸高校は、少子化、入学者の絶対数が減りつつある世情の中、学科改変を試み、その社会的使命を果たすために努力を続けています。念願の水耕温室も完成し、校舎新館と食品製造棟の間の敷地の庭に植えられた樹木も根づき周囲の風景にようやくなじみ、しっとり落ちついてきています。

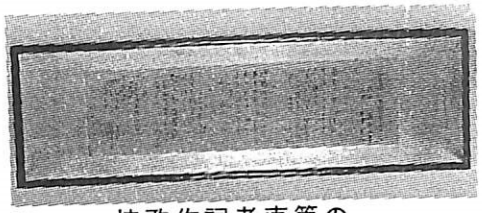
職業高校・・・農業高校だからというまちがった悪しき負のイメージを打ち破り、学校に寄せられる地域・社会の要請にこたえるための対応が、二十一世紀の人口爆発、地球環境問題の悪化、食糧危機のきざしが心配されている[15]いまだからこそ切実に求められています。学校あげて、何をどう教え、学びを深めていって若い世代が育つ働きかけを実行していくか、学校の根本をどこに求めていくか、明確なヴィジョンを打ち立てるときが来ているのです。

このような諸問題を原点から見直していくキーワードの一つは、校風です。時代と状況の変化に処していくために、しっかりとした個づくり、自立した人間性を育てることが繰り返し指摘されています[16]。その学校で学ぶ生徒の間に見られる伝統的な気風を、いいかえれば、日々の学校内の生活環境の全体的な水準を校風＝その学校らしさ、スクールアイデンティティと呼んでみたいと考えます。二十一世紀を見通したこれからの学校づくりを構想するとき、過去の蓄積・財産の、どの部分を受け継ぎ、発展させていくべきかの吟味が必要ではないでしょうか。いたずらに楽観したり、実際以下に自校を評価する態度は取られてはならないと思います。かたくなにこだわるのではなく、二十一世紀を生き抜く、しなやかでしっかりした人材が育つための手だて（特に倫理面での節度、モラル、理念）を確立するた

めに新しい校風をつくろうという声が出てくるように希望しています。

当事者として、およそこのような学校づくりを思い描く立場にある方々が、具体的に行動した実例は、農芸高校の場合、一つには校歌制定があげられます。

学校らしさをどう表現したのか、今一度校歌の歌詞のなかにその思想を探してみたいと思います。第二章で並記した二つの校歌を見直すならば、農芸高校の校歌が、まず、三番まで作られていること、次に、詞文の文意に農芸高校の理念がもりこまれるよう工夫され、註もよりくわしいことから高校教育への期待の強さが反映されているようです。



校歌作詞者直筆の
歌詞原本（校長室）

歌詞原本の後半、注のところに注目してみましょう。校歌一番河原田という地名の古名「河後」の読みを『大日本地名辞典』に依りつつ掲げ、三番の「ローマのうたびと」が詩聖とうたわれたウェルギリウスであることを示し、一～三を通して、最も農芸高校らしさをうたいあげた言葉、「すべてに勝つと称えたる額の汗」[17]の出典をあげます。

この箇所をラテン語原文に忠実に記します。

Labor（ラボル） omnia（オムニア） vicit（ウィーキット） improbus（インプロブス）
(persistent toil overcame all)
- Vergilius（ウェギリウス）, Georgica（農耕詩） 1,145（第1巻 145行）.

訳文を三つ。

（1） 生活がきびしく、必要に迫られた時、不屈の労働がすべてを克服した。（河津　千代氏訳）[18]

（2） 撓（う）むことのない勤労と、さし迫った必要とは、波立騒ぐ人生に於いて、あらゆる障碍（しょうがい）に打ち勝った。（越智　文雄氏訳）[19]

（3） 悪しき労苦（ラボル）とつらい生活の中で差し迫る欠乏（レグスケース）が、すべてを征服したのであった。（小川　正廣氏訳）[20]

この三種の訳文を読み進めると、壽岳氏は、理屈でなく、平明なことばを選び出し、原文の思想にもり込んだ歌詞を作り上げるのに成功したといえましょう。一番でも、農業の本質を「いのちを開く智恵のかぎ」[21]と位置づけています。戦争で疲れ切った社会を建て直し、日々の暮らしを安定させ、心の潤いを取り戻して、笑顔で互いを受け入れ合える満ち足りた「食」を手に入れるための労働。作物の手入れや世話をするうちに、日に日に大きくなる姿を目の当たりにする

にし、収穫に至る働く喜びを体感する時間。気候や土壌、品種や水分・温度など自然に対する経験や科学的な知識を総合して冷静に、その土地その年の状況を見抜く洞察力。このような諸要素の結晶としての農業[22]が、その真価に見合った評価を受けていた昭和二十年代の世相が、さらにいえば世の人々の農業へ向けられたまっとうな価値観が校歌の歌詞にうかがえるのです。

二十一世紀が間近い現在、この当時の農業にくらべて、いえ、その思いの丈にならって何を自校の教育の核心にするか学びとり、時代を先取りする校風が切実に求められています。

五．むすびにかえて

三番にわたって述べられた農業や仕事を重視する立場を色濃く含む校歌の歌詞にはまた、作詞者の昭和二十五年当時のヨーロッパ精神を理解したいという意志もにじみでているところがあります。それは、三番の始めに「昔ローマのうたびとが」とある、ウェルギリウスを採り上げたところから察せられます。第三章第二節でふれたとおり、壽岳氏は後年ダンテの『神曲』翻訳を成し遂げられます。この文学は、ルネサンスの発展につながる不滅の作品でありました。古典的な、ギリシア・ローマの精神性が、ヨーロッパ中世の時代に輝きを取り戻すきっかけとなった大作です。

『神曲』を読むと、重要な語り手としてウェルギリウスが繰り返し登場してきます。その人を「ローマのうたびと（＝詩人）」と表現し、代表作『アエネーイス』よりも『農耕詩』を引用する着眼にも、大学者の面目がよく発揮されているように思われます。ヨーロッパのこころにとって、ローマがどれくらい重いものか一つだけ例を示します。

（1822年描く、カンバス、油彩、原寸189×246）

世界史の教科書で必ずと言っていいほどフランス革命にちなんでドラクロワの作品（「自由の女神」）が載っていますが、彼の初期の代表作に「ダンテの船」があります。現在、パリのルーブル美術館蔵となっています。別名を「ウェルギリウスとダンテ」といって、左にダンテ、右にウェルギ

リウスを描き「神曲」地獄篇第八歌から想を得たものと評価されています[23]。十九世紀ロマン主義の開花を告げる一作となりました。

さて、年の瀬の一日、下河先生が昭和二十年に指導された桑名・照源寺を訪ねました。戦災をまぬがれた名刹の山門から広々とした寺内を見わたせば、どこまでも静かでゆったりとしたたたずまいが歳月を忘れさせてくれるかのようです。当時、桑名東方にあった下河先生の御自宅に近いこのお寺の本堂を教室にして英語を教わった若い人々との心の通い合いは、そのまま学びの証しでありました。

農芸高校へ通勤する行き帰り、いま銀杏並木にかかる正門近くあたりを通るたびに「偲ぶ草」巻頭の写真にある旧校舎を背にして見える下河先生に時空をこえて話しかけられているかのように感じられたことがよくありました。住まいも、衣服も、日々の食までも思い通りのものが入手できなかった戦後の動乱期に若い世代を育てることに心血を注いだ先人が一人ならず見えたことに尊敬の思いを深くしました。滅びてはならないこころがあるとも。

校歌にこめられた願いを受け継ぐ人たちに、正しき者よ、強くあれと告げたい気持ちにかられます。未来へ託された諸事を君たちがまっとうに相続して、さらに次に来る若者へと引き継いでいく分別と創意を兼ね備えた人物に成長してゆくことを。そして、よりよく生きることに努め、成長してゆく大人であり続けるように。　その土台づくりを担う進取の決心と行動が、日本人全体に求められています。なぜなら、教育とは、未来に責任を持つことだからです。

（注）

（1）前稿一五九頁

（2）ここには中部中学校初代校長として坂井善三氏があげられています。その当時、四日市四ッ谷新町にあった、農芸高校と同タイプの校歌があるとの事情は判明しません。下河津一氏によれば、各種記録とちがい、下川氏が校長職を勤められたのは中部中学校であるとのこと。この間の事実関係については今のところ不明

とせざるをえません。ただ、『偲ぶ草』の略歴、『四日市市教育百年史』、『伊勢年鑑』（昭和二五年版）の記述では、下河氏は、四日市市立北部中学校（現・富田中学校の前身）の校長先生とあります。

（3）壽岳文章氏令嬢章子氏の御教示によります。

（4）この頃の食糧難については、よく教科書などで記述されていますが、四日市地域の実情については新版『四日市市史　資料編　近代1』に詳しく取り上げられています。また、飢餓の実体験を持つ世代が減りつつある現代リアリティーを持ってその当時の食糧事情に迫る一冊として、栄養不足で早逝したわが子の短い一生を写真でふりかえった影山光洋氏『芋っ子ヨッチャンの一生』（新潮社、一九九五年四月刊）は出色の記録になります。

（5）昭和二十二年、県下の農業系高校には、合計して二二三人の学生数しかありませんでした。（『三重県教育史年表統計編』四一一頁）。平成八年現在は、約三二五六人。

（6）昭和十四年、下河先生が初めて着任された頃、津高一年生であった中井信義氏の御教示によります。

（7）『英語教育辞典・年表』（東京法令出版、昭和五五年四月刊）一一〇頁

（8）下河先生の別の著作『改訂版三位一体総合英語の新研究』巻末にも、同じ質問券が印刷されてあります。

（9）四日市農芸高校同窓会創立十周年記念『会員名簿』（平成元年刊）

（10）書名『英語文法作文解釈基礎練習』の巻頭。なお、注（5）前掲書（三五頁）によれば、下河先生が、本校から神戸高校校長に転勤された昭和二十六年四月一日に、『河原田高校の家庭課程に食物科が設置される（県下で初めて）』と記され、ここからも在任中に本校教育の充実に多方面から取り組んでみえたことが明らかです。

（11）大八州出版、一九四六年刊

（12）河原書店、一九四七年刊。なお、壽岳氏の和紙への探求は、この後もさらに深められて、例えば、『和紙の旅』（芸術堂、一九七三年間）としても結実しています。

（13）『大澤壽人の夕』所載の同氏の略歴による。なお、『NHK　ラジオ年鑑　一九五一年版』には、大坂中央放送局の『洋楽』部門で「九月以降の月曜日午後四時の『管弦楽の時間』には、大放響を中心に新しい特殊編成の『大坂ラジオシンフォネット』を組織し、大澤壽人の斬新な編曲と指揮が注目を集めた」とこの年の活躍が記されています。（同書一九五頁、昭和二六年十二月刊）

（14）民法の草分け的存在。その当時、わが家にラジオを買い入れ、放送を聞くのは、乱暴なたとえ方かもしれないが、現在のワイド画面でハイビジョン放送を初めて見るときめきに通じるかもしれない。ホームソングとは、昭和二十五年当時『明るく健康、家庭で一緒に歌える』ことを意図して相次いで作られていた愛唱歌のこと。

（15）これら諸点については、類書が多い。特に毎日新聞がシリーズで連載している『二十一世紀危機警告委員会』メンバーによる対談を紹介するにとどめます。

（16）これについても多彩で豊富な議論でありますが、今年出色の一冊として林道義氏『父性の復権』（中公新書、一九九六年五月刊）をあげたいと思います。

（17）前稿では、この直筆補注部分を『すべてに勝つと称えたる額の汗の貴さ』までと解釈し、そのように言及したのですけれども、その後河津千代氏より、額の汗までが適切な訳文に相当して、貴いの部分は作詞者オリジナルの考えであること、一部誤記のあったところを補訂した正しい原文表記の二点について御教示を得ました。本稿で記した原文箇所は、全面的に同氏によるものです。記して感謝の意を表します。

（18）同氏『牧歌・農耕詩』（未来社、一九八一年刊、新装版が，九四年に各々刊行）一九〇頁

（19）同氏『田園詩・農耕詩』（生活社、昭和二二年刊）。この訳文についても河津氏の御教示によります。

（20）同氏『ウェルギリウス研究』（京都大学学術出版会、一九九四年二月刊）三六二頁。

（21）注（二〇）前掲書（二九四頁）で、小川氏は、『農耕詩』全体を通してウェルギリウスが『労働は、自然から身を守るためのやむえぬ手段であり、一種の『災難』であるとはいえ、それは結局価値観のある様々な技術を生み出し、黄金時代には眠っていた人間の精神を研ぎ澄まし、それを目覚ませた』と位置づけしていたと解説してみえます。

（22）現代日本と農業については、原剛氏『日本の農業』（岩波新書、一九九四年二月刊）が、現状について全体像を明示し、この半世紀の農業の変化に関しては、岸康彦氏『食と農の戦後史』（日本経済新聞社、一九九六年十一月刊）が詳しい。また、21世紀農業の基本戦略と健全な農業であることの重みについては、各々、嘉田良平氏『農政の転換』（有斐閣、一九九六年五月刊）と渡部忠世氏『農は万年、亀のごとし』（小学館、一九九六年七月刊）に委細が尽くされている。さらに、江戸時代の大開発から来世紀への展望までもを視野に入れて、農業の再生を諄々と

語り尽くした好著として小島慶三氏の三部作、『文明ての農業』・『「農」に還る時代』・『農業が輝く』（何れもダイヤモンド社、順に一九九〇年三月、一九九二年二月、一九九四年十二月刊）を通読することも農の在り方について裨益するところが多い。水田稲作農耕の場合、中山間地の果たす国土保全機能、水質浄化作用、環境保全について知見を深める必要があるが、そのためには井上ひさし氏『コメの話』『どうしてもコメの話』（共に新潮文庫オリジナル版、刊行は各々一九九二年二月と，九三年十一月）やJ・ハイマス氏の『たんぼ』（NTT出版、一九九四年五月刊）『おこめ』（小学館、一九九六年十一月刊）、今森光彦氏『里山物語』（新潮社、一九九五年十一月刊）『棚田』（講談社、一九九六年二月刊）にあげられた息をのむ美しさいっぱいの写真を通覧されるのも一法でしょう。

（23）『世界美術全体集14　ドラクロワ』（小学館、昭和五二年六月刊）一三六頁

（付記）

今回の稿をまとめるにあたり、農芸高校の佐々木校長先生、高島教頭先生、松生先生、徳田先生、高岡先生を始めとする諸先生方から御指導に預かりました。また、所引の諸資料に関連して、下河先生御三男下河津一氏、壽岳氏令嬢の章子氏、大沢壽人氏令息壽文氏はもちろん、四日市中部中学校長谷川教頭先生や県内県外主要な図書館のスタッフ各位に一再ならずお世話になりました。記して心よりお礼を申し上げます。

なお、私事にわたるのですが、農芸高校からの転勤にあたって職場の先生方からお心尽くしの寄せ書きをほどこした色紙を頂戴しました。左側に校歌にちなんで「この河原田の学びやは若人われらの心のふるさと、と共に歌った四日市農芸高校の想い出に」と記され、真中に『画伯』と敬愛される井土雄幸先生の筆による校舎スケッチ画の色彩が鮮やかです。身に余る幸せを授かりました。互いを支え、励まし、遊びやゆとりの一時も交えながら教育者として、一人の人間として高め合えた職場でした。下河先生以前のお名前も知らない先輩の方々から連綿と続いてきた次代を育む、目立たないけれど、未来を開くためには決して一日たりとも疎かには出来ない任務に精励されてきた先輩教員の方たちと一緒に、今、ここにいると実感できた日々でもありました。

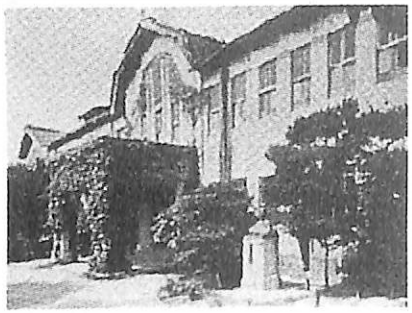
時代が変わり、教育の内容、学校の役割が改めて検討されなければならない現在、受け継いでいきたいと願うのは、ソフトの部分です。すなわち、将来の世の中を展望し構想する視野の広さ、眼前の生徒諸氏の内側の心の揺れや日々

の変化を察知する力、伸び盛りの心身に寄り添って即応できる柔らかい感性と健康、限られた教師個人にできることを補い合い協働で一つ一つの責任をこなしていく自覚、などの総合です。あえて要約すると、教師としての良心です。およそこのような教師集団の真面目が、様々な場面で発揮されていた農芸高校への感謝を告げ、これからも学校が躍動することを願い叙述を図りました。

公私ともにお世話になった先生方と、担任していたクラス二年A組の、そして授業で、部活動で、さらに日々の学校生活の中で顔を合わせた在校生諸氏全員に拙文を捧げます。

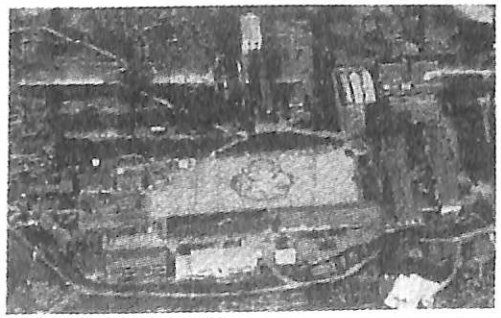
（一九九六年　一二月下旬稿了）

（のざき　としひろ　前・四日市農芸高校教諭）



「白亜の校舎」として有名だった旧校舎正門の光景

鉄筋になる前の校舎・校庭まで収めた全景写真（河原田駅の方角より）



校章の人文字を校庭いっぱいに広げた体育祭のひとこま